

吹奏楽ハンドブック

製作：河野省悟、田寺聡子

メモ

2019.11.17 茨木市吹奏楽団 オータムコンサート 2019

吹奏楽、つまり管楽器と打楽器によるオーケストラは、管楽器の歴史と言っても良いでしょう。

原始・古代

管楽器の歴史は笛から始まりました。意外にも出土した楽器は打楽器よりも、管楽器の方が古いのです。ドイツでは、約3万5千年前の洞窟から笛が見つかっています。日本でも、縄文時代の遺跡から土笛が出土しています。古代エジプト（紀元前16世紀～紀元前11世紀）になると、リード楽器やラッパが誕生します。古代ローマでも、儀式や行事などで軍楽が使われていました。



中世

中世ヨーロッパでは、吟遊詩人や旅芸人が音楽家としての役割を担っていました。世俗的ではあったものの、当時の音楽家は様々な楽器を演奏でき、歌を歌っていたそうです。

この音楽家達は作曲や作詞ができたわけではなく、芸能のオフシーズンに、曲や歌などの新しい情報を交換するために集まっていた。

これがその後には音楽家達の学校になり、演奏技術を磨く場となりました。またその集まりが、自然とアンサンブルや合奏といった概



念を生み出したと考えられます。

教会が管楽器を取り入れ始められ、警備隊の合図にも使われるなど、徐々に社会に浸透していきました。

吹奏楽の起源は、教会が派遣する十字軍の軍楽隊として管楽器と打楽器により構成されたものと言われています。

管楽器と打楽器により大きな音が出ることができ、どこでも演奏できる吹奏楽は軍隊と相性の良いものでした。管楽器と打楽器の大きな音は、自軍を大いに勇気づけることができ、そして敵を威嚇することにも有利でした。

ルネッサンス期

ルネッサンス期に入ると、大きな変化が吹奏楽の世界に起こりました。楽器が大きく進化したのもこの時代です。フルート、ホルネット、トランペット、サクソバット（トロンボーンの起源）、ダブルリード楽器などが発明されました。また、印刷技術の発展により、楽譜の印刷が可能になったため、音楽が体系立って確立されることになりました。



ジョヴァンニ・ガブリエリはこの時代を代表する作曲家です。合唱と管楽器を組み合わせ、その演奏効果を最大限に追求しました。ピアノやフォルテと言った強弱記号を用いた最初期の作品を作ったのも、ガブリエリでした。

バロック期

バロック期に入ると、音楽と演劇を組み合わせること、すなわちオペラが始まりました。ここで作曲家達がかかえた問題は、それまで発展したポリフォニー（複数の独立した声部）が演劇に適していないことでした。そこで、単一のメロディ（ソロ）とホモフォニー（最高音がメロディとなり、他が伴奏となる）が実用化されます。この芸術形態の楽器の伴奏として楽器の概念が発達し、交響楽団へと発展していきます。また、この頃に、トランペット、ホルン、オーボエ、ファゴットといった楽器が発展し主流となりました。

ハルモニウムジークと古典吹奏楽

18 世紀になるとオーケストラが定着し、弦楽器がほぼ完成を見せました。しかしながら、管楽器は楽器のみならず、その効果的な使用方法も研究が行われていました。管楽器はオーボエとファゴットを中心にフルート、コントラファゴット、バセットホルン、イングリッシュホルンなどが人気がありました。フレンチホルンを除き、金管楽器は控えめに用いられていました。

この時期にハルモニウムジークといわれる、Ob2、Cl2、Hr2、Bsn2 を一般とする 8 管編成による器楽演奏が生まれました。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトといった巨匠たちもハルモニウムジークのためにいくつか曲を作曲しています。特にモーツァルトは多くの曲を残しています。

これらが今日の吹奏楽の原型と考えられます。

近代

19 世紀に入ると、アメリカ、ヨーロッパ、イギリス各地でそれぞれのスタイルの吹奏楽が発展しました。19 世紀初期にはメンデルスゾーンが「吹奏楽のための序曲」を作曲し、それは吹奏楽の歴史における重要な 1 曲です。この曲は当初ハルモニウムジークの曲として書かれていましたが、後に吹奏楽編成のために本人により書き直されました。

器楽演奏のみならず、軍楽バンドのための曲も数多く作曲され、19 世紀以降の交響曲作曲家の多くが吹奏楽曲を作曲しています。

現代

20 世紀にさしかかると、アメリカでスクールバンドが確立されました。楽器メーカーによる販売促進のために、1923 年に初めてコンテストが開催されましたが、これは当初の目的を大きく超えて成長しました。学校の楽団に安定をもたらし、演奏技術と音楽性の基準を大幅に高めました。

イギリスで大きく発展したブラスバンド文化により生まれた作曲家達もこぞって吹奏楽曲を提供し、ホルスト、ウィリアムズ、グレインジャーにより多くの名曲が作曲されました。

日本でも学校教育に吹奏楽が取り込まれ、文化的にも大きく発展します。吹奏楽コンクールが1940年に始まり、多くの作品が生まれ、日本の吹奏楽文化に大きく貢献しました。

ルネサンス	1540	ジェルヴェイズが出版物に記録として残る ドイツでコラルが生まれる
	1541	声楽中心から、器楽曲が普及するようになる
	1543	和音・不協和音が発見される
	1558	サクソバット(トロンボーンの起源)、セルパン、 ツィンク(トランペットの起源)が誕生する
	1603	メロディの調性やしっくりしたリズムが確立される
バロック	1639	オペラが誕生する
	1685	バッハ誕生
	1708	バッハがヴァイマルの宮廷のオルガニストに着任 この頃に「小フーガ」が作曲された
古典派	1756	モーツァルト誕生
	1770	ベートーヴェン誕生
	1782	モーツァルト、セレナード第12番を作曲
	1809	ベートーヴェン、軍楽のための行進曲を作曲 メンデルスゾーン誕生
ロマン派	1824	メンデルスゾーンが15歳で、吹奏楽のための序曲 を作曲
	1835	サン＝サーンス誕生
	1869	サン＝サーンス、東洋と西洋を作曲
	1872	ヴォーンウィリアムズ誕生
	1878	東洋と西洋がパリ万博の表彰式で演奏される
	1895	ヒンデミット誕生

近代	1921	アルフレッド・リード誕生
	1923	ヴォーンウィリアムズ、イギリス民謡組曲を作曲
	1923	「大阪市音楽隊」が結成される
現代	1940	日本で吹奏楽コンクールが始まる
	1941	太平洋戦争により、コンクールが中断
	1947	スウェアリンジェン誕生
	1948	三島郡茨木町・春日村・三島村・玉櫛村が合併して 茨木市が発足、大阪府で13番目の市制となる
	1951	ヒンデミット、交響曲変ロ調を初演
	1960	團伊玖磨により祝典行進曲が作曲される
	1960	現在の東京佼成ウインドオーケストラが、 「佼成吹奏楽団」として結成
	1964	茨木市吹奏楽団、設立
	1970	リードの「音楽祭のプレリュード」が吹奏楽コン クールの課題曲になり、リード人気のきっかけに
	1972	アルメニアンダンス パートI、完成
1973	アルメニアンダンス パートI、初演	
1981	リードが初来日	
1997	小宮田紗規誕生	
2005-6	2019年中学校選抜バンドの奏者が誕生	
2011	吹奏楽コンクールで「天国の島」が課題曲となる	
2019	吹奏楽のための組曲「花」、作曲および初演	

吹奏楽の楽器

吹奏楽では、木管楽器、金管楽器、打楽器そしてコントラバスが通常の編成で用いられます。これらの楽器について少しだけここでご紹介しましょう。ここに載っていない楽器もあります。吹奏楽の奥の深い世界を覗いてみましょう。



フルート Flute

ピッコロ Piccolo

フルートの祖先は、旧石器時代のヨーロッパで動物の骨で作られた横笛だと言われています。ルネッサンス時代にフルートの原型が現れました。17世紀後半にキイが1つ加わり半音が鳴らせるようになりました。1847年にドイツのテオバルト・ベームがパリ万博にて金属製のフルート発表し、現代的なフルートが完成されました。

ピッコロは「小さいフルート」と考える方が多いですが、大きさ以外にも異なる部分がたくさんあります。フルートは管の太さが変わりませんが、ピッコロは高い音域に適応するため先端に向かって細くなる円錐型になっています。また、フルートは金属製のものが主流なのに対し、ピッコロは音が鋭くなりすぎるのを防ぐため、今でも木製のものが多いです。

オーボエ Oboe

ダブルリードの歴史は大変古く、古代エジプトの壁画にもダブルリードと思われる楽器（葦笛）が描かれています。葦笛が起源になるダブルリード楽器はもともと野外楽器として発展し、世界中に広がりました。

フランス語で「高い音の木」という意味があるオーボエは、17世紀の中頃にフランスで生まれたとされています。19世紀中頃のオーボエ界ではドイツ式とフランス式の二つが並び立っていましたが、ドイツの有名な作曲家兼指揮者が「フランス式の方が好きだ」と言ったことで一気にフランス式が勢力を伸ばしたのだとか。現在使われているオーボエもフランス式が採用されています。



クラリネット Clarinet



クラリネットは木管楽器の中でも比較的新しい楽器で、ニュルンベルクのヨハン・クリストフ・デンナーによって、18世紀初頭に発明されたと言われています。現在の構造は、楽器製作者のテオバルト・ベームが作った木管楽器のアイデアを元に、クローゼが19世紀の半ばに完成させました。古楽器はツゲで作られていましたが、現在の主流の材料はグラナディアラです。ツゲに比べて比重が大きくしっかり支えて演奏できるため、大音量で吹くことができます。古代音楽では重要視されていなかった、豊かな表現力やダイナミックスレンジの広さが時代の流れとともに必要になったので、楽器の材料も変化していったのです。

バスーン Bassoon

バスーンの祖先は 16 世紀ごろ生まれたとされています。中でも「ドゥルシアン」という楽器は長い管が二つ折りになっており、現在に近い楽器です。「ファゴット」と呼ばれることもあります。フランス語で「束ねられた 2 本の木」を表すファゴッテ (fagottez) に由来するといわれています。2 本の管が通るダブルジョイントに、テナーとバスのジョイントをさして組み立てられ、由来通りの形をしています。

金属でできたボーカル部分には高い音や小さい音を出しやすくするピアニッシモキィが付いています。コルクのすぐ横にある音孔は単に穴が開いているだけではなく、ボーカルの内側に飛び出た細い針のようなパイプへつながっています。この微妙な形のパーツ、ボーカルの中を掃除する時に折ったり曲げてしまったりする人が多いので注意が必要です。



サキソフォーン Saxophone

様々な吹奏楽器が演奏できた楽器製作家のアドルフ・サククスにより 1840 年に考案された楽器がサククスです。金管楽器と木管楽器の音を溶け合わせ両者のバランスを保つ目的で開発されました。アドルフ・サククスはこの楽器だけでオーケス



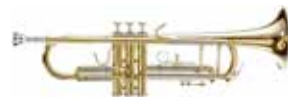
トラを作ることを想定していたため、開発当初は 14 種類もあったといえます。サククスは強弱の幅が木管楽器の中でもっとも広く、音色は人間の声に極めて近いと言われていています。楽器の形状はすべて円錐型になっており、円筒型の楽器に比べて感情をより豊かに表現出来るので、ソロ楽器にぴったりと言えるのです。

トランペット Trumpet

トランペットの起源は数千年も過去まで遡ることができます。ギリシャ、ローマ時代には戦争行進に使われていました。そんなトランペットが純粋に音楽に使われてのは 17

世紀のころ。この時使われていた楽器は「ナチュラルトランペット」と言われ、自然倍音が出るだけの楽器でした。息の通り道を切り替える装置「バルブ」が 1820 年代に開発されてからは演奏しながら管の長さを変えられるようになり、半音階の演奏も可能になりました。

今日の演奏会では一般的なピストン式のものだけではなくロータリー式のトランペットも登場します。ロータリー式は、弦楽器や他の管楽器と響き合うやわらかい音が特徴。ピストン式は華やかで、他の楽器の上から聞こえるような目立つ音がします。



フリューゲルホルン
Fluegelhorn



コルネット
Cornet





トロンボーン Trombone

トロンボーンは 15 世紀中頃に生まれたとされています。人間の音域に近く、合奏で荘嚴なハーモニーを奏で 18 世紀には「神の楽器」として扱われるようになり、作曲家たちも宗教的な音楽以外の音楽で使うのを控えたと言われています。

トロンボーン最大の特徴である「スライド」。まっすぐに作ってあるのですが、実は中管の先が 0.3mm ほど太く樽型になっています。この部分はストッキングと呼ばれ、近代に考案されました。昔のトロンボーンは中管と外管が全部擦れていたため、摩擦による抵抗が大きくメロディを演奏するのは難しかったのです。しかしストッキングが開発されたおかげで中管と外管の擦れる部分が減って抵抗が少なくなり、トロンボーン演奏は飛躍的に変わりました。

フレンチホルン French horn

ホルンの起源は動物のツノなどで作った「角笛（つのぶえ）」です。16 世紀まで狩猟時の信号用楽器として発達し、馬に乗りながら吹けるように管を大きく巻いて肩に提げられるようにしました。その際邪魔にならないように、ベルは後ろ向きになったと言われています。



19 世紀中頃までのホルンは「ナチュラルホルン」と呼ばれ、ベルと円形に丸められた管にマウスピースをつけただけの、非常にシンプルな構造でした。この構造では自然倍音以外の音を出すのが難しいため、18 世紀ごろ、ベルに手を差し込むことで音程が変わる「ゲシュトップ奏法」が発達しました。19 世紀に中頃にバルブが開発されてから現在の形に近い「バルブホルン」が生まれました。



ユーフォニアム Euphonium

バスチューバを開発したドイツ人のヨハン・ゴットフリート・モーリッツがバスよりも音域の高いテナールチューバを開発し、同じくドイツ人のフェルディナント・ゾンマーがさらに改良を加えて「ユーフォニウム」という名前をつけたことから、ユーフォニウムの歴史は始まりました。ゾンマー自身による演奏活動によってソロを担う楽器として発展し、現在の形状・音色になったと言われています。

同じころ、サクソスの生みの親でもあるアドルフ・サクソも金管楽器のシリーズとして様々な音域のサクソルンを開発していました。その一つであるバスサクソルンがユーフォニウムと同じ音域だったため、バスサクソルンをユーフォニウムの名前で売り出し、大好評だったという記録もあります。





チューバ Tuba

1835年9月12日、ドイツ人の軍楽隊長ヴィルヘルム・ヴィープレヒトと楽器製作者のヨハン・ゴットフリート・モーリツによってチューバの原点となる「バスチューバ」という楽器が発明されました。この日に特許を取得した記録が残っているので、チューバの誕生日は明確なのです。発明されたのが19世紀だったこともあり、チューバは初めからバルブ装置付きでした。さらに1840年代

に、チェコのヴァーツラフ・チェルヴェニーという楽器製作者がもっと音の低い楽器を発明しました。これが現在のC管とB♭管にあたるものです。さまざまな人が、それぞれの考えでつくった楽器の中で現在に残ったものを、まとめて「チューバ」と呼んでいるのです。

コントラバス Contrabass, Double bass

4弦(まれに5)からなる弦楽器で、バス、ベースと呼ばれることが多いのですが、吹奏楽ではコントラバスと呼ばれます。なで肩の形状、平らな裏板、4度調弦、弓の持ち方(ジャーマン式)といった特徴から、ヴァイオリン属の中で唯一起源の異なる楽器とされます。チューバの発明以前より吹奏楽で使われていたため、現在でも吹奏楽ではコントラバスが通常の編成として用いられています。



打楽器 Percussion

打楽器とは、打つ、こする、振るなどして音を出す楽器で、人間が初めて作り出した楽器と言われており、様々な民族に残っています。弦楽器や管楽器と比べて原始的で、長い歴史を持つと考えられています。おもに、膜を叩くもの(いわゆる太鼓)と本体を叩くもの(体鳴楽器)があり、その中でもさらに音階を持つものと持たないものがあります。

吹奏楽で使われる打楽器には奏法を合わせると100以上の種類があり、リズムを表現する物以外にも、風の音、波の音を表現する楽器もあります。打楽器奏者はこれら全ての楽器の演奏を求められます。

ピアノ、ハープ、電子楽器 Piano, Harp, Electronics

ピアノやハープも吹奏楽で用いられることの多い楽器です。ただし、メインで聴かせることはあまりなく、補助的に使われることが多い楽器でもあります。また、近年では電子楽器が用いられることも増えてきており、シンセサイザーのサウンドを要求する作曲家もいます。

